

BEST HiFi
Accessory

2021 SUMMER

WestminsterLab

STANDARD

¥412,500 (1mペア / 税込) ①

ULTRA

¥825,000 (1mペア / 税込) ②

ULTRA C

¥999,000 (1mペア / 税込) ③

XLRインターコネクトケーブル

●取り扱い: (株) ブライトーン

TEL:03-6869-0516 ホームページ:<https://www.bright-tone.com/>

独自性とハンドメイドを追求 ロンドン発の新ブランド上陸

Text by
井上千岳
Chitake Inoue
Photo by 田代法生

Profile | ウェストminsterラボが2007年にロンドンで誕生したオーディオブランド。そのデビュー作はUSBケーブル。当時としてオーディオ専用のUSBケーブルの先駆者の1つとして誕生したメーカーである。以後は、クラフトマンシップに基づき、すべてを自社の手作業で手掛けるケーブルのラインアップ着実に増やし続けている。本項ではまずは3ランクのXLRインターコネクトケーブルを皮切りに、同ブランドの魅力に迫っていこう。

徹底追求された燃り角度 カーボンスリーブも特徴

2007年にロンドンで設立されたブランドで、ケーブルのほかアンブも開発している。ケーブルのラインアップは多彩だが、まずここではXLRインターコネクトケーブルに絞って紹介する。

同社のケーブルは非常に入念で徹底した研究の上に成立しているが、その要素は大きく分けて導体構造、シールドの3つが特徴と考えてよさそうだ。

まず導体は無結晶銅や銀など様々な素材を試した結果、独自の組成によるAustria Alloyという無結晶合金を開発した。これに高温と極低温の処理を繰り返して施し、さらに表面を手作業で鏡面研磨したうえでプラック・エナメル・コーティングをかけてから、PTFEチューブに挿入して仕上げていく。

導体は単線で、構造はツイストペアを基本とする。ただし通常のツイストとは違って燃りの角度に変化を持たせ、ケーブル全体の中で種々の角度で撚り合わせる構造

としている。Vari-Twistという独自の構成である。

シールドは一般的な銅やアルミでは外来ノイズを反射することはできず、かえって内部に吸収されてしまうとして、カーボンファイバー・スリーブを採用している。高コストではあるが、Vari-Twist構造と組み合わせること

で最高の結果が得られるという。XLRインターコネクトケーブルは「STANDARD」と「ULTRA」の2種類があり、さらに「ULTRA」はカーボンファイバー・シールドの有無で2つに分かれる。順に聴いてみたい。

●「STANDARD」 デリケートで繊細な音質 陰影の深い鳴り方も魅力

「STANDARD」は豊富な情報量と繊細な表現力を備え、硬質感や緊張感を排して切り口が大変デリケートだ。ピアノはニュートラルなタッチで誇張がなく、広いレンジにわたってニュアンス豊かな再現を展開している。陰影の深い鳴り方だ。

室内楽も当たりが柔らかく弾力的で、弦楽器にもピアノにもきめ

細かな響きが常に乗っている。楽器どうしの分離がよく、暴れや濁りがなく表現は緻密に変化する。

オーケストラは肉質感が厚く響きが澄み、ダイナミズムの幅が大きく壮麗な鳴り方だ。大音量でも混濁がなく、瞬発力にも富んでいるが荒れることがない。表面はあくまでも滑らかである。

●「ULTRA」 澄んだ余韻が伸びていく 豊かで存在感のある響き

カーボンファイバー・シールドなしの「ULTRA」は響きが豊富で、澄んだ余韻が遠くまで続いているようなイメージの出方だ。ピアノはデリカシーがさらに緻密さを増した印象で、タッチの微細な凹凸がもつと細かさを加えている。また室内楽では一音一音の豊かな響きが空間的な存在感を高めている。どの楽器にもそこにあるという実体感が備わり、音の彫りが深まっているのも確かだ。

オーケストラではそれがいつそう明らかで、ホルテの音量が上がったように強靭だ。音場感もリアルティを増している。強力だが濁りや歪みがなく、壮大な響きは

常に整然として揺るがない。

●「ULTRA C」 静かさがさらに増して 余韻と奥行きが深まる

カーボンファイバー・シールドを備えた「ULTRA C」は余韻が増えて奥行きが深まり、瑞々しさがますます高まっている。周囲の静かさが増して、それが空間性をさらに引き立てるといふ具象だ。

ピアノはひっそりとした静寂感が非常にたっぷり引き出され、音の周囲に余韻の輪が広がるのを見るような気がする。タッチの質感そのものも大変きれいで汚れがなく、繊細な煌めきにより明瞭に感じられるのである。

室内楽もはっきりと実体が見える感だ。強弱の起伏が滑らかで表現は流麗だが、細部まで入念に引き出されて表情は抑揚に富む。

オーケストラの音場感は、ホール全体が見渡せるようなレベルになっている。弾力的な肉質感もリアルな手触りで描かれ、トゥッティの大音量は峻烈なアタックになつて見上げるような壮大さを感じさせるのである。